

序言

近世～近代における東アジア比較史の試みは今なお十分に開拓されてはいない領域であるのかもしれない。ここでは詳論は避けるが、16 世紀以降の東アジアはそれぞれ独自の「伝統社会」形成に向けて「近世化」していく過程であり、いわばそれぞれの社会・文化の特質がより顕在化していく時代でもある。しかし、この異なった社会様態を洗練させていく過程を巨視的に鳥瞰すれば、そこには同時に共通の脈動が存在することも見て取れる。東アジア比較史の面白さは、この個性化と共振の二つの方向性を、ともに一つの視野に収めて検討することにあるだと言えよう。

本論集に収められた各論文は、それぞれ東アジア各地域における特定の事象に焦点を当てた論考であり、一つ一つの論文自体は必ずしも「比較史」を意図して執筆されているわけではない。しかしながら、執筆者はいずれもこの比較史研究プロジェクトに参加して議論を交わしてきた故に、そこに自ずから比較史へのまなざしが内在していることが見て取れるであろう。

もちろん実証自体はなお萌芽的な着想の段階に止まっているものもあり、それらは今後の研鑽に期待したい。厳しい叱正をいただければ幸甚である。

プロジェクト代表 山田 賢